

モチモチの木（斉藤隆介）

井上 智香、山本 賢史、山根 夕佳、吉川 美那子

一 作者と作品について

○作者について

一九一七年、東京都に生まれる。本名は斎藤隆勝（たかかつ）。一九三三年、第一早稲田高等学院に入学。三五年、中退。山本有三を慕って明治大学文学科に入学。在学中ゴーストの影響を受ける。卒業後、北海道新聞、秋田魁新報の記者を歴任。新聞記者のかたわら著作活動に入る。

秋田地方の方言、オノマトペをふんだんにちりばめた民話の体裁をとりながら、ほとんどは斎藤の創作童話である。当初は子ども向けではなく、地元の教員や生徒の父母に向けた作品でありながら、画家滝平二郎の独特な挿絵、絵本化によって次第に有名な児童文学作家となる。滝平とは末永い創作活動を続けることとなる。

単純で骨太な展開、生と死のはざままで揺れ動く主人公を描くことで、人間が根源的にもっている情念・情愛からほとばしる生への尽きぬエネルギーに満ちあふれている。一方、献身、自己犠牲といった説話くさい主題、表現で、発表当初から賛否両論を巻き起こしたものの、戦後の児童文学史上、童話および絵本の新分野を開拓し、民話絵本ブームを起こし、小学校の教科書にも取り上げられ、数々の業績を残した。斎藤の作風は主に古田足日をはじめ、神宮輝夫、今江祥智、藤田のぼ

るなどに強い影響を与えた。

主な作品は、『八郎』（初出：一九五〇年 秋北中学校新聞 福音館書店）、『ペロ出しチョンマ』（一九六七年 理論社）、『花さき山』（一九六九年 岩崎書店）、『モチモチの木』（一九七一年十一月 岩崎書店）などがある。

短編童話集『ペロ出しチョンマ』で一九六八年第十七回小学館文学賞、『天の赤馬』で一九七八年第18回日本児童文学者協会賞、『ソメコとオニ』で一九八七年第十回絵本にっぽん賞を受賞。一九八五年十月三十日没。

(Weblio 辞書 <http://www.weblio.jp> を参考にとまとめた。)

○作品について

「モチモチの木」は一九七一年十一月に岩崎書店から発行された。後に一九八二年



に同じく岩崎書店からの「斎藤隆介全集」にも収録されている。この作品は小見出しのついた五つの場面から構成されている。夜中に一人では小便にも行けないほど臆病者である豆太だが、ある夜、大好きなじさまが倒れ、夜道への恐怖心を抱えながら一人で医者様を呼びに走る。

教科書には、一九七七年（昭和五十二年）度版、日本書籍「小学国語四下」に掲載されたのが初めてである。現在では、二〇一一年（平成二十三年）度版、光村図書「国語三下 あおぞら」、同じく学校図書「みんなと学ぶ 国語三下」、同じく教育出版「ひろがる言葉 小学国語三下」に掲載されている。また、学校図書では二〇〇五年版から「しりょうへん」として掲載されており、挿し絵は諸橋精光さんである。二〇一一年版では「しりょうへん」から本文で扱うことに見直されている。

二 叙述について

全く、豆太ほどおくびょうなやつはいない。

冒頭を「豆太ほどおくびょうなものはいない。」という言葉から始めることで、豆太が臆病ものだという前提を読者に強く認識させている。そうすることで、物語の後半部分から展開される豆太の勇氣ある行動を際立てることへとつなげている。

ところが、豆太は、せつちんは表にあるし、表には大きなモチモチの木がつつ立っていて、空いっぱいの髪の毛をバサバサとふるって、両手を「わあっ。」「とあげるからって、夜中には、じさまについていってもら

わないと、一人じゃしょうべんもできないのだ。

これはモチモチの木についての描写であるが、枝葉のことを「髪の毛」や「両手」と表現しており、擬人法が用いられていることから、豆太にとって、夜のモチモチの木は植物ではなく、おぼけや妖怪のような生き物に見えていることがわかる。

じさまは、ぐっすりねむっている真夜中に、豆太が「じさまあ。」ってどんなに小さい声でいっても、「しょんべんか。」とすぐ目をさましてくれる。

ぐっすり眠っていると人は小さな物音ではなかなか目覚めないが、じさまの場合はぐっすり眠っていても、豆太が「じさまあ。」と小さい声で言っただけで目を覚ましてくれるところから、豆太のことをいつも思い、大切にしていることがわかる。

いっしょにねている一まいしかないふとんを、ぬらされちまうよりいいからなあ。

この一文で一人でしょんべんに行けないだけではなく、一人で寝ることもできないことという読み方と、一まい「しか」ないふとんと強調している点から、布団を二枚買う余裕のないじさまと豆太の貧しい暮らしぶりを表しているという二つの読み方ができる。

それに、とうげのりょうし小屋に、自分とたった二人でくらしている豆太が、かわいいそうで、かわいかったからだろう。

ここでも、「たった」二人だと強調しているところから、おとうもおかあもない豆太を不憫に思うじさまの気持ちが読み取れる。また、

後で出てくる医者様を呼びにふもとの村へ行くために二キロも走っており、物語全体を通して登場人物は三人という点からも、家に二人で住んでいることを述べているというよりは、峠の小屋の周りにも人が住んでおらず、峠に二人つきりで暮らしていることが読み取れる。

それなのに、どうして豆太だけが、こんなにおくびょうなのだろうか――豆太のおとうやじさまの勇敢な性格や肝の据わった行動を述べた後で「それなのに」と段落を変えて豆太の臆病さに対して半ばあきれたように、また、不思議そうに述べることでどれほど豆太が臆病なのかを強調している。

モチモチの木つてのはな、豆太がつけた名前だ。

「つてのはな」と読者に語りかけるような口調で文が書かれている。これは作者である斎藤隆介の文章の特徴で、話し言葉や秋田の方言、オノマトペを用いることで堅苦しさをなくし、民話を、語りかけるような読みやすく、親近感のわきやすい文章に構成している。

「やい、木い、モチモチの木い、実い落とせえ。」

豆太は臆病だが、モチモチの木をずっと恐れているのではなく、昼はモチモチの木に対していばっている点から、夜のモチモチの木だけを怖がっていることがわかる。

「ああ、いい夜だ。星に手がとどきそうだ。おく山じゃあ、しかやくまめらが、鼻ちようちん出して、ねっこけてやがるべ。それ、シイーツ。」
 って言ってくれなきゃ、とつても出やしない。

夜のモチモチの木を怖がる豆太に対して、じさまは「ああ、いい夜だ。星に手がとどきそうだ。」と星などの美しいものに注目させてみたり、「鼻ちようちん出して、ねっこけてやがるべ。」とおどけてみたりと夜に対して怖いイメージをなくそうとしながら、毎回豆太のトイレに付き合っただけでいることから、じさまの豆太を思う気持ちや優しさが読み取れる。

五つになって「シ」なんて、みつともないやなあ。

「みつともないやなあ。」と作者が読者に対して同意を求めるような口調で文が書かれている。こうすることで作者と読者の両方で豆太を見守るような雰囲気が出来上がる。ここまで一貫して豆太の臆病さについてあらゆる視点から説明し、いかに豆太が臆病なのかを読者に認識させることで、次の段落の「霜月二十日のばん」での豆太の勇氣ある行動の強調につなげている。

豆太はちっちゃい声で、泣きそうになった。

「小さい」よりも「ちっちゃい」の方がより小さい感じが伝わる。「泣きそうに」とあることから、豆太はまだ泣いていないことがわかる。

だって、じさまもおとうも見たんなら、自分も見たかったけど、こんな冬の真夜中に、モチモチの木を、それも、たった一人で見に出るなんて、とんでもねえ話だ。

豆太の言葉にならない気持ちを表している。だって、とあり、夜にモチモチの木を見に出られないことの言い訳や、それを正当化しようとする気持ちが読み取れる。「こんな」「たった」という部分から豆太

の恐怖心が強調されている。また、句点を短い間隔で打つことで、豆太が泣きそうになっていることが伝わる。

「昼間だったら、見てえなあ——。」

昼間のモチモチの木に対する恐怖感はないということがわかる。夜の、灯のともるモチモチの木を見ることはとてもできないと思っっている。「」で終わることから、モチモチの木を見てみたいという気持ちはあるように思われる。

豆太は、はじめっからあきらめて、ふとんにもぐりこむと、じさまのたばこくさいむねん中に鼻をおしつけて、よいの口からねてしまった。

「よいの口」というと夕方の五時〜六時の時間帯であり、とても早い時間から豆太たちが寝てしまったことがわかる。夜のモチモチの木を見ようということは少しも考えていない。

豆太は、真夜中に、ひよつと目をさました。

「ひよつと」という表現から驚く、びっくりしているような様子がわかる。「はつと」「とつぜん」などの表現では、驚くような雰囲気あまり感じられなくなってしまう。

むちゅうでじさまにしがみつこうとしたが、じさまはいない。

豆太はくまのうなり声におびえ、じさまにしがみつこうとしたが、隣にはいなかったことがわかる。また、「むちゅうで」から豆太がじさまに甘えている様子がわかる。

まくら元で、くまみたいに体を丸めてうなっていたのは、じさまだった。

豆太がおびえていたくまのうなり声の正体は、じさまの苦しそうな声だった。じさまはまくら元にいたので、豆太の隣にはいなかった。また、くまのうなり声が頭の上から聞こえたのもそのためである。

こわくて、びくちらして、豆太はじさまにとびついた。

この部分の「こわくて」はくまのうなり声のことだろう。また、豆太がじさまにとびついたのはじさまが心配だったからだろうか。豆太が、くまのうなり声におびえてしがみつこうとしたからのように考えられる。「こわくて」からは、じさまが倒れていることに対しての恐怖心ととらえることもできる。

豆太は、小犬みたいに体を丸めて、表戸を体でふつとばして走り出した。

「小犬」という表現にすることでより体が小さな様子や、豆太の弱さや守られる存在であることがわかる。「体を丸めて」からは、「表戸を体でふつとばす」のために力をためている姿勢を取っていることがわかる。また同じ言葉から、首を引込め脇をしめて体を縮めている姿勢を取っているという、二つのことを読み取ることが出来る。前者であれば「体を丸めて」は「表戸を体でふつとばして」に係り、後者であれば「走り出した」に係っていくと考える。「ふつとばす」という勢いのある力強い言葉と「小犬」という可愛らしさも感じられる言葉が対比的である。「走り出した」という言葉から、豆太の急いでいる様子が読み取れる。

いたくて、寒くて、こわかったからなあ。

地面には霜が降りていて、豆太ははだしで走っているの、「いたい」「寒い」ということがわかる。ここでの「こわかった」の対象は夜だと考えられる。

でも、大すきなじさまの死んじまうほうが、もっとこわかったから、なきなきふもとの医者様へ走った。

「大すきな」と書くことで、じさまが死んでしまうことがどれだけ豆太にとって悲しい事なのかを読者に強く伝えようとしている。「もっとこわかった」の「もっと」とは、その前の文の「こわかったからなあ」と比較している。「こわかったからなあ」では、真夜中に一人で医者様の所まで行かなければならないのが怖かったが、それよりもじさまが死ぬ方が怖かったとすることで、さらに豆太がじさまの死を強く恐れていることがわかる。また、豆太が臆病であるという設定があるので、その臆病な豆太が一人で医者様を呼びに行くほど、じさまが死んでしまうと思ひ込んでいたことがわかる。「なきなき」という表現は、「泣きながら」という意味だが、ただ「泣きながら」と書くよりも必死な様子が伝わってくる表現である。

これも、年よりじさまの医者様は、豆太がからわけを聞くと、「おう、おう——。」と言って、ねんねこぼんでんに薬箱と豆太をおぶうと、真夜中のとうげ道を、えっちら、おっちら、じさまの小屋へ上ってきた。

医者様の「おう、おう——。」セリフは、あわててきた豆太の様子とは違いあまり焦りを見られない。「これも」というのは、じさまと比較されており、じさまと同じくらい高齢の医者様ということである。一番近くの医者が高齢と言うことから、豆太とじさまが町から離れた

所にすんでいるのではないかと推測出来る。また、「年よりじさまの医者様」という表現からは、医者様がのんびりしている感じが読み取れる。さらに、医者様が峠を登る様子も「えっちら、おっちら」と表現されており、ゆっくり進んでいるような印象を強く受ける。また、来るときは自分で走ってきた豆太が、ねんねこぼんでんにくるまれておぶってもらっている所から、豆太が非常に疲れてしまっていたのだと思われる。薬箱と一緒におぶれる点からは、豆太がまだとても小さい子なのだとわかる。

とちゆうで、月が出てるのに、雪がふり始めた。

「出てるのに」はい抜き言葉であり正しくはないが、話し言葉で語られているためここでは使用されている。月が出ているということは晴れ間があるということだが、それなのに雪が降っているという不思議な雰囲気を表している。何か起きそうな予感を感じさせる一文である。

そして、医者様のこしを、足でドンドンけとばした。

豆太が何かに焦っている様子が現れている。ねんねこぼんでんに覆われて医者様におぶさっているため、もっと急いで上ってほしいという意味を込めて腰を蹴飛ばしている。また、豆太が雪が降り始めたことよってパニックになってしまったという考えも出来る。雪が降り始めたということは、それだけ小屋を出発してから時間が経っているということであり、はやく戻らなければという思いからパニックになっていると推測される。どちらにしても、豆太のじさまに対する思いからの行動と思われる。

じさまが、なんだか死んじまいそんな気がしたからな。

豆太はじさまが死んでしまうことを恐れて、医者様の腰を蹴飛ばしていたことがここでわかる。おもわず医者様の腰を蹴飛ばしてしまうことから、豆太がどれだけじさまが死ぬことを怖がっているかがわかる。また、「なんだか」というのは、根拠はないけれども、という意味だが、晴れているのに雪が降るといふ不思議な雰囲気と、雪が降り出してしまふほど医者様がゆっくりと峠を登っていることから、豆太がそう感じたのだと思われる。

豆太は、小屋へ入るとき、もう一つふしぎなものを見た。

豆太と医者様が、じさまの小屋に到着したことがわかる。「もう一つ」とは、晴れているのに雪が降っていたこと一つと数え、さらにもう一つ不思議なことが起こるといふことである。

けれど、医者様は、「あ、ほんとだ。まるで、灯がついたようだ。だども、あれは、とちの木の後ろにちょうど月が出てきて、えだの間に星が光ってるんだ。そこに雪がふっているから、明かりがついたようにみえるんだべ。」と言って、小屋の中へ入ってしまった。

豆太が明かりのついたモチモチの木を見た場面であるが、医者様が事実を教えてくれるセリフである。「まるで」とはそのように見えるが実は違う時に使われる言葉であり、ここでもモチモチの木に明かりが灯ったわけではないことを表している。また、豆太が「モチモチの木」と呼んでいるのに対し「とちの木」と医者様が呼ぶことよって、大人の医者様は本当のことを知っていることを表している。「入ってしま

った。」という表現も、医者様がモチモチの木の事を話すと、すぐに小屋に入った様子を表しており、特にモチモチの木に感動するような様子がわからないことがわかる。

だから、豆太は、その後は知らない。

豆太も医者様に続いてすぐに小屋に入ったことがわかる。それだけじさまのことが心配だったということが読み取れる。また、モチモチの木のその後を見ていないので、医者様の言ったことが本当なのかどうかを確かめることが出来ないこともわかる。

でも、次の朝、はらいたがなおって元気になったじさまは、医者様の帰った後で、こう言った。

次の朝にはじさまのは腹痛が治ってしまったことから、豆太の心配は杞憂に終わったことがわかる。もしかするとじさまの腹痛は演技で、豆太の臆病を直させるために、医者様と口裏を合わせて一芝居うったのではないかという考えもあるが、推測の範疇である。

「おまえは、山の神様の祭りを見たんだ。モチモチの木には、灯がついたんだ。おまえは、一人で、夜道を医者様をよびに行けるほど、勇気のある子どもだったんだからな。自分で自分を弱虫だなんて思うな。人間、やさしささえあれば、やらなきやならねえことは、きつとやるもんだ。それを見て、他人がびつくらするわけよ。は、は、は。」

豆太が見たのは「山の神様の祭り」「モチモチの木には、灯がついたんだ。」ということで、豆太が見たものを肯定しようとする、じさまの優しさが読み取れる。その後続く「一人で、夜道を」の部分は、ど

れだけ豆太がすごいことをやったのかを強調する役割を果たしている。「人間、やさしささえあれば、やらなきゃならねえことは、きつとやるもんだ。」というのは、この作品の主題ともいえる部分である。豆太は臆病で怖がりだったが、じさまのために医者様呼びに行ける優しさを持っていた。それこそが本当の勇氣なのであるのだ、ということをも豆太に伝えることで、読者にも伝えようとしている。最後の「それを見て、他人がびつくらするわけよ。は、は、は。」というのはじさまのジョークであり、じさまが気分が良くなり、嬉しがつている様子がわかる。

——それでも、豆太は、じさまが元気になると、そのばんから、「じさまあ。」と、しよんべんにじさまを起こしたとき。

「」から始まるこの文は、作品のつけたしの様な扱いである。いわゆるオチの文となる。「じさまが元気になると」とは明かりが灯った次の日であり、話のすぐ後にはもとの豆太に戻っていたことを表している。

三 考察

(一) 人物関係

この物語の主な登場人物は豆太とじさまと医者様の三人とモチモチの木である。ここでそれぞれの関係について考察していく。

★豆太とじさま

〈じさまから見た豆太〉

じさまにとって、豆太は可愛くて仕方のない存在である。

豆太には両親がいない。豆太の父親は猟の際に亡くなった。また、母親については書かれていないが、何らかの理由で一緒に暮らせないのでろう。そのため、豆太はじさまと二人で、猟師小屋で貧しい暮らしをしている。じさまは両親のいない豆太を不憫に思っている。しかし、真夜中に小さい声でじさまを呼び掛ける豆太の声に応じ、トイレへ一緒に連れていくことから、豆太を可愛いと思いいびやかしていることがわかる。

また、山の神様のお祭りの話をして早くから寝てしまった豆太に対して、夜遅くまで起きてモチモチの木を見に行くことを期待していなかったと思われる。

このようなことから、じさまは普段の夜は手にかかる豆太が自分のために真夜中に医者様を呼びに行ったことに対して驚き感激し、さらに愛着が湧いたことであろう。

〈豆太から見たじさま〉

豆太にとってじさまは大好きで特別な存在である。自分を恐怖から守ってくれることはもちろん、四六時中一緒に生活していることから、じさまに対して特別な気持ちが生えたと考えられる。また、豆太は幼い頃に両親からの愛情を受けなかった分、必要以上にじさまに甘えているのではないだろうか。

ここで、霜月二十日の晩、じさまに対する思いが行動となって表れた。怖いという気持ちとじさまを守りたいという気持ちとの葛藤が勇氣に変わった瞬間である。

しかし豆太は、じさまが元気になると元のおくびょうな豆太に戻ってしまった。やはり、大事な人を守りたいという優しい気持ちが強く

なったからこそ、勇気が生まれたのではないか。

★豆太とモチモチの木

豆太にとってモチモチの木の昼間の姿と夜の姿は違う。昼間のモチモチの木はおもちの元である実を落とす木であり、全く恐怖心を感じていない。むしろ、モチモチの木に対して威張っている態度を示す。しかし、夜になると、豆太の目にするモチモチの木は巨大な人間であり自分を襲う人間だという認識でいる。

しかし、山の神様のお祭りである灯が灯ったモチモチの木を見るのが出来る条件は、霜月二十日の丑三つ時、勇気のある一人の子供だけというものである。

そのため、じさまに言われたモチモチの木に灯りが灯ることを聞いても、見たいという気持ちよりも怖いという気持ちが先立ち、見ることを諦めていたようだった。

しかし、霜月二十日の晩に勇気を出して医者呼びに出た際、モチモチの木に灯がついた様子を目の当たりにしたのだった。モチモチの木は豆太を認めたのだろうか。その時豆太はどのように思ったのだろうか。記述はないが、霜月二十日の晩の出来事は豆太にとって大きな出来事のはずだ。じさまとおとうと同じように山の神様のお祭りを目にする事ができたのだから。豆太が大人になった時にも思い出すような出来事であると思われる。

★じさまとモチモチの木

じさまやおとうも山の神様のお祭りを見たということから、モチモチの木は昔から存在しているということが分かる。猟師だったおとう

やじさまはどのような勇気のある子どもだったのだろうか。

(二) 豆太は成長したのか

豆太は五つとあるので、幼稚園の年中組くらいの子どもにあたる。普段臆病でじさまに甘えてばかりいた豆太だった。しかし、霜月二十日に山の神様のお祭りを見たことから、一晩に限り勇気のある行動をすることが出来たと言える。果たして、これは豆太の成長と考えるべきか、それとも豆太は生来臆病のではなく、勇気のある子どもだったのかどちらであろうか。

豆太が成長したと仮定すると、何故じさまが元気になった後、もとのじさまに甘える豆太になったのだろうか。霜月二十日の夜の出来事を経て、豆太が成長し、夜中に一人でトイレに行くことが出来るようになってもおかしくない。確かに、結果としては、以前の豆太と変わっていないように記されていた。しかし、詳細は記されていないから、今後何らかの変化は見受けられるかも知れないとも考えられる。

また、豆太が生来臆病のではなく勇気のある子どもだとすると、臆病な姿は環境によって形成された姿となる。両親がいないのは何らかの理由があり、その出来事があったのは少なくとも豆太が五歳より下の年齢の時だと言える。豆太が今よりも更に幼いころ、豆太と両親の間は何があったのだろうか。また、その時豆太はどのような気持ちだったであろうか。この時の経験から豆太が臆病になってしまったということとは推測できる。ところが、霜月二十日の夜、じさまを救いたいという優しい気持ちが原動力となり、豆太の奥底にあった勇気が現れた。これらを踏まえるとその時の生来の豆太の精神は、二キロもある道のりを裸足で泣きながら走るほど、彼の中ですさまじいもので

あったことが分かる。

(三) じさまの病気は仮病？

じさまは腹痛で苦しんでいたが、あれは仮病だったのではないだろうかという疑問について考察していく。

じさまは自身を臆病だと決めつける豆太に、ひとつの成功体験を経験させることを通して自分に自信を持つて欲しかったのではないか。

これは、じさまの病気がすぐ治ってしまったことと医者様の危機感のない行動の二つの点から考えられる。特に二点目に関しては、豆太が必死に訴えるのに対して、「えっちら、おっちら」と小屋の方へ上る医者様の行動は危機感のなさを覚える。このことから、医者様はじさまの仮病のことを既に知っていたのでは、ということも考え得る。

やはり、「可愛い子には旅をさせよ」という言葉にもあるように、じさまは可愛がっている臆病な豆太に成長するきっかけになって欲しいという願いを込めて、仮病を仕組んだのではないだろうか。また、霜月二十日の山の神様のお祭りの日というタイミングで仕組んだのは、豆太にやればできるといふ自信を、体験を通して実感させたかったからではないだろうか。

